
Nacht

置き去りにした一つの思い出

灰色日記帳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Nacht 置き去りにした一つの思い出

【Zコード】

Z0205Y

【作者名】

灰色日記帳

【あらすじ】

「女子中学生変死事件」。

鶴村にて一人の少女が何者かに惨殺され、見るも無残な姿で発見された事件。今日はその事件が起きてから一年が経った日の、九月二十四日。

犠牲となつた少女と親しかつた少年、一月は生前に少女が祖母と一緒に暮らしていた家へと向かう。事件の真相、そして少女の死の真相を探る為に。そこで彼が目にした物は……。

断罪、贖罪、そして悲劇の物語が今、紐解かれる。

其ノ零～一月ノ追憶～（前書き）

どうも、他の連載小説でお世話になっている方は改めまして。
初めての方は初めまして。灰色日記帳と言う者です。

これまで連載中の作品では「虹色冒険書」という名前を使つていま
すが、この作品ではその名前は余りに不釣り合いなので、違つ名前
を使わせて頂きます。

この小説は、「Fragment of braves」とは相反
する雰囲気で、上手に書けるか不安です。

読んでみての感想、アドバイス、また誤字脱字の指摘など、是非お
願いします。

この物語はフィクションであり、実在の地名、人名とは一切関係
ありません。

其ノ零　～一月ノ追憶～

人が死を迎ふる時、その肉体は土へと帰るが、
生前にその者が抱きたりし想ひは現世に残る。

怒りや恨み、憎しみ、嫉み。

現世に残されし死人達の負の想ひは連なり、寄り添ふ、
やがて「鬼」となりて形を成す。

「鬼」となりし負の感情の塊は、
行き場のなき想ひを鎮める生贊を求めて生者を襲ふ、死の世界へと
誘ふ。

死の世界へと誘はれし生者の魂は「鬼」の負の思念に取り込まれ、
思ひ出も記憶も、理性も全て失ひ、「鬼」の一部となる。

鶴村の古い言い伝えより。

寝起きでぼんやりとした意識のまま、僕は布団に片手をついて身を起こす。

そして、視線を部屋の窓へ向ける。

空は雲に覆われていた。汚水を吸つた脱脂綿のような雲が、陽の光を遮っている。

今日の天気は曇り、か……雨は降るのかな？

そんなことを思いつつ、僕は布団を畳んで押入れに押し込んだ。

布団を片づけないと、畳張りの床が姿を見せた。そして僕はもう一度、窓から外を眺める。

前々から思っていたことだけど、曇りの日は何だか村の雰囲気が変わつて見える。

軒を連ねた民家に、朝から畠仕事をする人々の後ろ姿、学校に向かう小学生達。

いつも見慣れている筈なのに、空が雲で覆われているというだけで全てが変わつて見える。

上手く言葉では言い表せないけど、陽の光に照らされていない村の風景はどこか無機質で、物悲しくて……何かに例えるとするなら、白と黒だけで描かれた絵画のようだった。

……なんて、何だか詩人みたいな言い回しだね。

ああそうだ、自己紹介を忘れてた。僕の名前は金雀枝えにしだいしき一月。

十五歳、職業（？）は高校一年生。

『金雀枝』って名字はどうも珍しいらしく、「変わった名前だね」とかよく言われる。

「文子田の『雀』といつ字を覚えるのには相当苦労したのを覚えてる。

『山田』とか『田中』とか、書きやすい名字だつたら良かったのに、なんてことを本気で思つた程。

この鶴村には、僕みたいにややこしい漢字が含まれた名字の人は少なく、そういうつたシンプルな漢字から構成された名字の方が多いつたらしい。

鶴村。それが僕が生まれ育つたこの村の名前。

都市部から離れた田舎にあるこの村は、田畠や民家が軒を連ねていて、少し寂れた雰囲気があるけど、自然が豊かで、きれいで澄んだ空気に包まれている。
四字熟語を使って表現するなら、『風光明媚』といつ言葉がよく似合う農村だ。

田舎の割に人口は結構多くて、村の中には小中高の学校もある。

村の名前になつてゐる「鶴」（かわせ）つて言つのは、ある鳥の名前。

この鳥はカチガラスやコウライガラスとも呼ばれ、大正十一年に佐賀県の天然記念物に指定されたといつ。どうしてこの鳥が村の名前になつてゐるのかは分からぬ。村に何か縁のある鳥なのかなと思つたが、真相は不明だ。

今日は九月二十四日。

一九九三年にはノロドム・シハヌークがカンボジアの国王に再即位した日だつたり、

一九九九年には台風十八号が熊本に上陸した日だつたりもする。

そして、この九月二十四日という日は、僕にとって一年の中で最も因縁深い日だ。

畳の上に仰向けになつて、僕は机の上の写真立てに視線を向ける。写真に映つているのは面だけを外し、首から下を剣道着に包んだ一人の少年少女。

左側で、きこちない笑みを浮かべているのは中学一年だつた頃の僕。その隣、右側に映つている女の子は秋崎琴音。あきざきことね

ピースサインをしてるこの女の子は、僕と同じ師匠の下で剣道の稽古に励んでいた子。

つまり僕と同門だつた子だ。

思い返せば、琴音と僕が知り合つたのはお互おひがいいが小学三年生だつた頃。

僕が剣道場に通い始めて間もない頃だつた。

入門したての僕が道場で稽古に励んでいる琴音を初めて見た時、正直に言つと僕は彼女を男の子だと思った。

その理由は、面で顔が隠れていたというだけでなく、彼女の戦いつぶり。

覇気に満ちた掛け声と共に、相手を圧倒する彼女の姿は勇ましく、格好良かつた。

そこら辺の男の子よりも数倍は格好良い、そう言つてもいい程に。僕はあの子は男の子で、僕よりも年上で、何年間も剣道をやつている先輩なのだろうと思つた。

稽古終了後に彼女が面を外した時、短い髪型の女の子の顔が出てきた時は心底驚いた。

さらに琴音が僕と同じ年で、同じ小学校の、

それも隣のクラスに在籍していると知ったときはもつと驚いた。

知り合つてからは、剣道場だけでなく、小学校でもよく会つようになった。

休み時間に一緒に遊んだり、たまに放課後に家に来ることもあった。いつしか琴音は、僕にとって同門であると同時に、一番親しく、そして最も大切な友達になっていた。

入門して半年程経つた頃、僕は道場で一度、琴音と試合をした。結果は僕の完敗。

僕が繰り出す攻撃は一発残らず完璧に受け止められ、試合開始から一分と経たず、僕は面を打たれた。

あれは恐らく、『試合』にすらなつていなかつただろう。

僕は闇雲に竹刀を振り回し、琴音は僕の面を一撃打つだけのこと。実力の差は僕の思つていた以上に大きかつた。
彼女の強さだけでなく、自分の未熟さを思い知らされた瞬間だった。

た。

聞いた話によると、彼女は小学一年の頃から剣道を始め、そして二年という短期間であそこまで強くなつたのだという。琴音は別に、飛びぬけた才能を持っていた訳でもなく、入門した時は僕と変わらない、ただの小学生の女の子だったらしい。彼女は必死に稽古に励み、それこそ血の滲むような努力の果てに、あそこまでの強さを手に入れたそうだった。

そのことを聞いてから、僕も必死に稽古に励んだ。

強くなりたいという気持ちを勿論あつた。

だけどそれ以上に、琴音に少しでも追いつきたいという気持ちが強かつた。

厳しい稽古にくじけそうになる度に、

『琴音はこんな稽古を三年も積んできたんだ、男の僕が負けていてどうする』、

そう自分に言い聞かせて、気持ちを奮い立たせてきた。

剣道を始めてから、残り三年の小学校生活はあつという間に過ぎた。一年、二年、三年が経ち、気が付いた頃には六年生になつていて、卒業式を迎えていた。

卒業証書授与の時、名前を呼ばれるのを待つ間、僕は六年の小学校での思い出を振り返っていた。

入学式、遠足、運動会、学芸会、マラソン大会、友達の誕生日会に、クラスレク。

思い返せば思い返す程、六年の思い出が僕の頭に蘇ってきた。

式が終わってクラスでの帰りの会の後。

僕は家へ帰ろうと、卒業証書の入った賞状筒を片手に歩を進めていた。

その日は夕焼けで、空が鮮やかなオレンジに染まっていたのを覚えている。

僕の家が見えてきた頃だった、聞きなれた声で後ろから呼び止められた。

振り向くと、一人の女の子が手を振りながら、僕の方へと駆け寄つて来ていた。

その子は琴音だった。彼女は僕の近くに寄ると、いきなり僕の腕を掴んで駆け出した。

“一緒に来て欲しい所がある”、僕の手を引きながら、彼女は一言だけ告げた。

それから彼女は、僕の事など構いなしに目的地まで猛ダッシュした。

その時は、雪面で走り回る子供に引きずられるソリになつた気分だつた。

夕日に照らされた道をどれくらい走らされただろうか、

よしやく琴音が足を止めてくれた頃、僕は疲労で地面に倒れ込んだ。そこは通いなれた剣道場の前だつた。琴音は僕をここに連れてきたかつたらしい。

彼女はまた僕の手を引いて無理やり立たせ、道場の中へと引っ張り込んだ。

ずっと走りっぱなしだつたといつのこと、彼女は疲れていなかつたのだろうか。

その日、稽古でいつも使つてゐる畳張りの剣道場には、僕と琴音以外は誰もいなかつた。

窓からは夕日の光が差し、部屋をオレンジ色に照らしてゐた。嗅ぎなれた独特的の畳のにおいに、壁にかかつた掛け軸。

僕がここに通い始めたころから、何一つとして変わつていなかつた。

時計の長い針は、十一時前を指していた。

時間はまだ昼前だつた。この時間帯なら、人がいないのも納得できだつた。

僕ら一人の他に誰もいないといつだけで、道場がいつもより広く感じた。

琴音は、どうして道場に僕を連れてきたかたのだろう？ 理由を尋ねようとした時、琴音が僕の面と竹刀を僕に向けて投げ渡した。

戸惑いながらも、一つの剣道具を受け止め、視線を琴音に戻す。

彼女は面をかぶって、竹刀を握っていた。

そして、僕をこの剣道場に連れてきた理由をよしやく教えてくれた。

彼女は、僕と剣道の試合がしたかったのだ。

思えば、琴音と剣道の試合をしたのは、入門してだつた頃のあの
一回だけだった。

小学校卒業の思い出作りにもなるかと思つた僕は、彼女の申し出を
受けた。

その時は、僕も琴音も剣道具は面以外、籠手も胴も身に着けていな
かつたので、

『面を打たれたら負け。それ以外の部位は狙わない』といづルール
を設けて試合を行つた。

試合の結果的には、僕の負けだった。

初めての僕との試合から三年、琴音はさらに強くなつていたのだ。
足さばきはより俊敏に、動きに無駄が無く、

打ちは素早くて、かつ針穴を通すように正確に、僕の面を狙つて來
た。

琴音の攻撃を僕は必死に防ぐ。そして時に反撃を返す。

『互角』と呼べるかは微妙だった。だが少なくとも『試合』として
成り立つてはいただろう。

開始から十分近く経ち、先に言つたように僕は負けた。

長時間の打ち合いでスタミナが切れ、集中力が途切れた瞬間を突か
れた。

その一瞬の隙を突くセンスといい、途切れることのないスタミナと
いい、琴音の凄さを改めて実感した。

試合が終わった後、面を外して壁際に移動し、背中を壁に寄り掛か

らせる体制で座り込む。

呼吸を整えていると、僕の頬に冷たい物が押し付けられた。僕はそれを受け取った。その冷たい物は、五百ミリリットルのペットボトル飲料だった。

その中身は冷やされたお茶。

琴音の仕業だつた、彼女は僕の隣に座る。

彼女の手には、僕に渡されたのと同じペットボトルがあつた。そのキャップを外そうとはせず、今の試合を踏まえて、僕にいくつかの助言をくれた。

いや、あれは助言と言つよりは『指導』に近かつただろうか。

『足さばきを練習したほうがいい』とか、『体力をもつとつけた方がいい』とか……

剣道に関する事を、僕の隣でいろいろと講釈し始めた。

最早、僕には彼女の話をまともに聞ける程の体力は残つていなかつた。

うんうん、と適当に相槌を打ちながら聞き流していたから、琴音が僕に何を教えていたのかはわからない。

だけど、彼女が最後に言つた言葉だけは、今でもはっきりと覚えていふ。

“中学に進学しても、一緒に剣道やろうね”。

琴音は僕にそう言つてキャップを外し、ペットボトルを持った腕を僕の方へ伸ばした。

彼女が何をしたいのか察した僕も、キャップをはずしてペットボトルを伸ばす。

“小学校卒業、お互いにおめでとう”。

その琴音の言葉の後、乾杯をするように、互いのペットボトルを打

ち付け合つた。

小学校を卒業した日の午後、夕日に照らされた道場の片隅。僕と琴音は、ペットボトルのお茶を飲み交わした。

中学に進学した後も、僕と琴音は変わらず剣道場に通い続けた。

加えて僕達は中学校の剣道部に入部し、より本格的に剣道の稽古に励んだ。

その頃からだつただろうか、今までショートの髪型だつた琴音は髪を伸ばし始め、胸もふくらみ初めていて、小学校の頃よりもずっと女の子らしくなつていた。

僕はこれまで、琴音の事を一番大事な友達だとは思つていたけど、彼女にそれ以上の感情を抱いたことは無かつた。

その気持ちを自覚するのに、そう時間はかからなかつた。

僕は、琴音の事が好きになつっていたんだ。

真面目でひたむきで、優しくて、何事にも一生懸命な彼女のことが、いつの頃からか好きになつていたんだ。

だけど、彼女にその想いを伝えようとしなかつた。

今はまだ、琴音とは『仲の良い友達』という関係でいいと思つたから。

彼女と共に剣道の稽古に励めるだけで、彼女の側にいられるだけで、十分だと思っていた。

だから、抱いた想いは胸の中に仕舞つて、ただひたすらに強くなることを目指していた。

中学一年の夏、剣道の大会の決勝戦で、僕と琴音は竹刀を交えた。同じ中学校の者同士が決勝で戦うことは、これまでにも殆ど例がなかつたという。

小学校三年の頃の最初の戦い、小学校の卒業式の日の一度目¹の戦い、そして、あの決勝戦で、僕達が戦うのは三度目²だった。

はっきりと断言出来る。

その時の琴音は、剣道を初めてからこれまで僕が戦つたどの相手よりも強かつた。

三度目の戦い、やはり僕は敵わなかつた。

だけど、その試合が終わつた時、僕は悔しくなかつた。

悔しいどころか、むしろ満たされた気持ちだつた。

決勝戦という最高の場で、何年も共に稽古に励んだ親友の琴音と全力の力をぶつけ合つて、

そして負けたんだ。悔いなど、欠片一片たりとも無かつた。

負けたのに、嬉しかつた。

今でもどうしてだかわからないけれど、嬉しくて嬉しくてたまらなかつた。

閉会式が終わつて、僕は琴音と話していた。すると、僕の母親が会場まで迎えに来た。

母は琴音と僕が一緒にいるのを見て、バッグからカメラを取出した。そしてなんと、二人で記念撮影しないかと提案してきた。

僕の母親は、琴音と僕が小学校から仲の良い友達だということを知つてゐるのだ。

母の提案に、僕は渋つた。

周りに人が沢山いるのに女の子とツーショットなんて、なんだか恥

ずかしかつた。

けど、琴音の方はそんなことを気にする様子も無く、ノリノリで僕の腕を引っ張った。

突然の出来事に戸惑つたけれど、内心は嬉しかつた。
まさか、こんな場で好きな女の子と写真を撮れるとは思つていなかつたから。

その時に撮つた写真が、今も机の上の写真立てに飾られているこの写真だ。

この「写真の琴音の笑顔を見ると、数年経つた今でも彼女が在りし時のこと」を思い出す。

道場で初めて知り合つた時の「こと」一緒に剣道の稽古に励んだこと、この「写真を撮つたあの決勝の日のこと」……

数えきれない程の琴音との思い出が、碎かれた鏡の欠片を散らすようになく、僕の頭に蘇る。

そして同時に、耐え難い程に胸が苦しくなる。

苦しくて悲しくて悔しくて、あの時の馬鹿だった自分が赦せなくなる。

……ん？ どうことなのかつて？

ああそうだ、まだ……言つていなかつたね。

彼女は、琴音はもう……

この辺は、
いないんだ。

其ノ零 ～一月ノ追憶～（後書き）

どうでしたか？ 第零話は全て主人公の追憶でした。

これからのお話ですが、あくまで「Fragment of broken
avess」の方がメインですので、更新頻度は遅くなると思います。

この作品を読んでみての「」感想があれば、是非ともお寄せ下さい。

其ノ壱 ～全テノ幕開ケ～（前書き）

零話が字ばかりで読む気が失せた方は、ここのから読んで頂いても大丈夫です。

其ノ壱 ～全テノ幕開ケ～

それは一年前の秋に遡る。

鶴村の某中学校の校庭にて、一人の女子生徒（十四歳）が変死体となつて発見された。

その時刻は午後六時半頃。下校時刻を過ぎ、陽が沈み始めた頃だつた。

第一発見者は、被害者の女子中学生と同じクラスに所属していた当時十四歳の男子生徒。

男子生徒からの通報を受けて現場に駆け付けた警官たちは皆、言葉を失つた。

待ち受けていたのは、想像を絶するほどに残酷で悍ましく、戦慄すべき光景だつた。

静寂の中、仰向けに倒れていた女子生徒は、最早人間としての形状を留めていなかつた。

両手足は不自然な方向に捻れ、長い髪がもつれてカーテンのように顔の半分を覆い隠していた。

髪の隙間から覗いている瞳は充血し、焦点を帶びておらず、虚空に向けて見開かれていた。

口は開かれ、唾液と血液が混じつた液体が顎を伝つて流れ落ちていた。

そして、誰もが直視出来なかつたのが、彼女の腹部。

少女の腹部は制服ごと大きく裂かれ、内臓が露わになり、臓器特有

の生臭い臭気を放っていた。

夥しく流れ出た血液で、制服は腹部からスカートの先まで真っ赤に染め上げられていた。

赤い果物を踏み潰したかのように、彼女を中心にして血の水溜りが出来上がっていた。

その場にいた者全員が猛烈な吐き気を催す程の、見るに堪えない姿だった。

かつて命を持つて生きていたとは思えない、家畜動物のよつた扱いを受けた無残な姿。

これが人間の仕業だと考えただけで、背筋が凍りつきそうな程の悪意を感じた。

自分と同じ人間の命を、まるで虫ケラのように奪い、拳句こんな酷い姿に……

女子生徒を殺した人間は、人の皮を被つた化け物に違ひなかつた。

この事件は後に、「女子中学生変死事件」と銘打たれ、警察によつて大規模な捜査が展開された。

女子中学生を殺害した人外な犯人を突き止めるべく、警察はあらゆる捜査を行つた。

だが、懸命な捜査の成果は無く、事件発生から一年経つた今も、犯人は捕まつていない。

九月二十四日、天氣は曇り、時刻は午後一時。

鶴村の某高校の屋上から突き出た階段室の上に、金雀枝一月は仰向

けに寝そべっていた。

仰向けに寝そべって、鶴村を覆っている曇りの空を見上げていた。
どこを見上げても灰色で、どこか無機質で、そしてどこか物悲しさ
を感じさせる空だった。

一月は体を起こす。そしてポケットから携帯電話を取り出した。
黒い携帯電話を開き、液晶画面の右上に表示された日付と時刻の表
示に目を向ける。

9 / 24 Tue

13 : 03

「あれから、今日で一年か……」

日付の表示を見て、一月は呟く。

彼が呟いた言葉は誰にも聞かれること無く、虚空へと消えて行つた。
九月二十四日。一月にとつてそれは一年の中でも最も因縁深い日だつ
た。

因縁深いとは言つても、別に彼の誕生日だとか、そういう日ではな
い。

九月二十四日。

一月にとつて一番の親友であり、同時に想い人でもあつた少女が殺
された日なのだ。

彼の言つた通り、あの日から今日で一年になる。

「（……琴音……）」

一月はその一文字を心の中で呟いた。

秋崎琴音。故人、現在はもう、生前の彼女を知る人々の記憶の中に

しか存在しない少女。

享年は14歳。もしも彼女が存命ならば、現在の一月と同じ年になつていただろう。

生きていれば一月と同じ高校へ進学し、友人を作り、普通の高校生活を送つていた筈だ。

その後も十年、二十年……もっと長く生き、人生を楽しみ、人を愛し、愛された筈だった。

だが、彼女の全ての可能性は、十四歳といつ若さで断ち切られてしまつたのだ。

繰り返すようだが、彼女が殺されたのは一年前の今日だつた。

「その時」の光景は、一年経つた今でも一月の記憶にしっかりと刻みつけられている。

まるで脳に焼き付けられるかのように正確に、かつ「写真のよう」に鮮明に。

静寂の中、辺りを赤く染める血の水溜り。その中心に仰向けに倒れていた

「……ぐつーー！」

固く目を瞑り、歯を噛みしめる。頭に浮かびやうになつた光景を必死に打ち消す。

あの光景を一瞬でも思い出すだけで、気が狂いそうだ。

「へそつ……ーーー！」

一月は悔しげに漏らす。

何よりも腹立たしいのは、琴音を殺した犯人が今も捕まつていない

事だ。

彼女の全てを奪つておいて今ものうのうと生きている犯人のことを考えると、身を裂くような怒りが込み上げてくる。

彼女を殺した罪を懲悔させるくらいでは足りない。

犯人を殺してやりたい。琴音と同じ痛みと苦しみを味わわせてやりたい。

いや、それでもまだ足りない程だ。

犯人が憎いのは当然だが、警察も警察だ。

琴音を殺した犯人を突き止められない？ ふざけるな。

それなら一体、警察は何のためにあるんだ。

市民の税金で飯を食つてる癖に、ただの無能な役立たず集団じやないか。

「……！」

冷静を取り戻した時、一月は自己嫌悪に駆られた。

今の一瞬だけ、自分がとても嫌な人間になってしまったような気がした。

だが、犯人への憎しみは消えなかつた。消える筈が無かつた。

一月はその場から立ち上がつた。

もうじき昼休みが終わり、午後の授業が始まる。

午後の授業が終われば、放課後だ。

放課後になつたら、琴音が生前祖母と二人で暮らしていた家に行こうと思つていた。

彼女が殺された理由や、犯人に関する手がかりが掴めるかも知れない。

犯人を突き止めてどうするといつのか？

警察が突き止められない犯人を、自分が突き止めることなど出来るのか？

一月は分からなかつた。

分かるのは、可能性が低くとも何も行動を起こさないよりは良いと
いう事。

このままでは、殺された琴音が余りにも浮かばれない。

一月は階段室の上から降り、階段を下りて自分の教室へと向かう。

……誰もいなくなつた屋上に、冷たい風が吹いた。

急に白い霧が巻き起こる、巻き起こつた霧は屋上の一点に集まり、
竜巻のように渦を巻く。

数秒の後、竜巻のように渦を巻いた霧がまるで溶けるように消え去
る。

霧が消え去つた代わりに、白い和服を着た一人の幼い少女が屋上に
姿を現した。

少女の和服の袖や裾と、長く伸びた艶のある黒髪が空気を泳ぐよう
になびく。

『みつけた……えにしだ、いつき』

微かに口を動かし、囁くような小さな声で少女はそう声を発する。
途端に、先ほどの霧のように少女が空気に溶けるように消え去つた。

「……それでね、この事件にはまだ続きがあるのよ」

「え……どんな？」

一月が教室に向かつっていた頃、曇りの日の午後一時の昼下がり。某教室で、一人の女子生徒が向かい合い、話していた。

その話題は、一年前にこの鶴村で起つた、「女子中学生変死事件」。

「それから数日後、殺された女の子と一緒に暮らしてたお婆ちゃんもね、死んじやつたんだって」

「そ、そんな……どうして……ー?」

「しかもね、そのお婆ちゃんも女の子と同じように、お腹を裂かれて、酷い死に方をしていたんだって……」

昼休みといつ憩いの時間に話すには、明らかに不似合な話題。数週間先にまで迫つた定期試験のことや、部活動の事。

もつと高校生らじくてまともな話題は幾らでもある筈だった。

「や、やだ……怖い……」天恒千早は両肩を抱え、表情を恐怖に染める。

対して、佐天文美天恒千早は千早が怖がるのも構いなしに続ける、

「それからね、女の子とお婆ちゃんが生前一人で暮らしていた家は『呪いの家』って呼ばれるようになつて、氣味悪がつて誰も寄り付かなくなつて、一年前から今まで、ずっと放つておかれてるの」

佐天文美は、クラスだけでなく学年でも有名なホラーマニアだつた。そのマニアぶりは、「歩くホラー辞典」という名譽なのか不名誉なのかもわからない称号を与えられる程。

彼女はホラー小説にホラー漫画、ホラー映画のDVDやオカルトビデオ。

この世に存在するあらゆるホラー関連作品に通暁していると噂されている。

その噂は正に名実一体。文美の部屋を訪れた者は皆例外なく、彼女のホラー関連作品のコレクションの量に度肝を抜かれるとか。

「ねえ千早、放課後さあ、行つてみない？」

「え、行くつて……まさかその『呪いの家』に！？」

文美の提案に、千早は耳を疑つた。

大のホラー好きな文美に對して、千早はホラー系統が大の苦手。その苦手さたるや、ホラー映画など当然見れないし、文化祭のお化け屋敷にも入れない程。

「そうだよー！ 何でいつかさあ、血が疼ぐんだよねえ。ホラーマニアな私としては」

目を輝かせ、うきつきと話す文美。千早にとつてはとんでもない提案だった。

このままでは、本当にその「呪われた家」に連れて行かれかねない。

どうにか話題を逸らそうと教室の中を見渡し すぐ近くの空いた席に視線が止まつた。

「やついえば金雀枝君……今日も独りでいるみたいだね」

千早が指した空席は、金雀枝一月の席だった。

「金雀枝？ ああ、あんなのほつといでいいわよ。あいつ誰とも話さないし、口から話しかけても余所余所しい返事しかしない変な奴だし」

文美は投げやりな口調で答える。

一月は、このクラスでは浮いた存在だった。休み時間にも誰とも話さず、昼休みはいつも屋上で昼食を摂る。

彼は容姿は悪くないし、運動も勉強もそこそこ出来るようだが、あまり人と関わりたがらない性格のようだった。

「そうそつ。噂で聞いたんだけどさ、金雀枝って何か中学の頃に一番の親友を亡くして、それ以来生きる気力を失ったとか……」

「え！？ そんな……金雀枝君、かわいそう……」

あくまで噂なので、本当かどうかは定かではない。
もしも本当なのだとしたら、彼に同情したくなる話だった。

だが、その噂は紛れもない「真実」だった。

さらに、一月が亡くした「一番の親友」というのは、つこちつきまで自分達が話していた「女子中学生変死事件」の被害者のことだったのだ。

もちろんそんな事は、文美も千早も知る由も無かつた。

昼休みの終わりを示すチャイムが鳴った。

「おつと。じゃあ千早、放課後は『呪いの家』に集合。マツハでね」

「えええっ！？ け、結局わたしも行くの！？」

話題を逸らして回避する作戦は、失敗に終わったようだつた。観念するしかないようだつた。文美は基本、一度思い立てば止まらないタイプだ。

大きくため息をつき、千早は机から教科書とノートを出し、次の授業の準備を始める。

もしも、文美があんな提案をしなければ。

もしも千早が、文美を強引にでも止めていれば。

あんなことには、ならなかつたのかも知れないのに……

佐天文美、天恒千早。この二人は、今日が命日となつた。

其ノ壱 ～全テノ幕開ケ～（後書き）

感想、アドバイス、評価、お待ちしております。
それにもしても、書いている自分まで鬱な気分になる作品です……

ちなみに、タイトルの「Nacht」は「ナハト」と読み、
ドイツ語で「夜」を意味します。

其ノ參 ～呪ワレタ家～

「あ、ああああ……」

「ぐ、来るな……こっちに来るなあ……」

天恒千早はその表情を恐怖一色に染め、
その隣で佐天文美は、恐怖に駆られながら、「そいつ」を威嚇して
いた。

だが、一人の眼前にいる「そいつ」は一向に止まる気配が無い。
ゆっくりと、ゆっくりと忍び寄り……文美と千早への距離を詰めて
いく。

「そいつ」が歩み寄つて来る分、一人は後ろへと後退していた。

「つー？」

どん。一人の背中に、何かがぶつかつた。

後ろを振り向く。背中に、古びた木の壁が触れていた。

もうこれ以上、後ろに下がることは出来ない。退路が断たれた。

「そいつ」の方を振り返つた瞬間、「そいつ」がこちらに腕を伸ば
していた。

二人は反射的に理解した。この腕が触れれば、自分達の命は無いと。
どうしてだかわからないが、一人にはそれが分かつた。

しかし 分かつていても逃れる術は無かつた。

「そいつ」の腕が迫る中。千早は恐怖に震え、文美はただ後悔して
いた。

ここは興味本位で来る場所では無かつたと、そして千早を巻き込ん

でしまったことを、深深く悔いた。

九月二十四日、午後五時過ぎ。

佐天文美、天恒千早。二人の少女は、十五年という短い生涯を終えた。

一月が帰宅した時、彼の母親は台所で夕食の下ごしらえをしていた。ジャガイモやニンジンや玉ねぎを刻み、鍋で煮ている。後ろから玄関の扉を開く音が響いた。一月が帰つて来たのだ。

「お帰り、一月」

居間に足を踏み入れると同時に、台所の方から母の声が聞こえた。

「ただいま」と一月は返事を返す。

そして肩に掛けていた鞄を下ろし、ダイニングテーブルの上に置く。

「……！」

一月は、ダイニングテーブルの上に置かれているクマのマスコットに視線を向けた。

クマのマスコットは体の部分が茶色で、目は小さな黒いビーズで作られている。

口はギリシャ文字の「――」のような形をしていた。鞄や携帯電話にぶらさげるくらいの大きさの、ミニサイズのマスコットだ。

「これって……もしかして……－？」

手に取つてみて、一月は確信した。

このクマのマスコットは、小学生の頃に琴音から貰つた、彼女の手作りの物だ。

大切にしていたが、何年も前に失くしてしまった筈だつた。
どうしてこれが、ここに

「掃除してたらね、どこからか出てきたのよ」

疑問を声に出す前に、一月の母が答えた。

「それ、一月が小学生の頃に琴音ひやんから貰つた物よね……？」

母の言葉に答へずこ、一月は手の平の上のマスコットに視線を向ける。

これを琴音から貰つた頃は、彼女は生きていた。元気だつた。
だけども……彼女は生きていない。

「……」

一月は無言で、じつとマスコットを見つめる。

彼女の命日の今日に、彼女から貰つた物が出てくる、言ひようの無い皮肉さを感じた。

「一月、琴音ひやんのことば……もづ、忘れなさい」

母の口から、その言葉が発せられた。命令とも忠告とも解釈出来る
言葉だった。

「え……？」母を振り向き、一月は一文字で返事を返す。

「担任の先生から電話があつたわ。一月君はクラスに馴染もうとしないで、いつも一人でいるんですって……」

「……」

「一月の気持ちは分かる。琴音ちゃんの事は、本当に氣の毒だったと思うわ」

「一月から返事は帰つて来ない。

一月の母は、一年経つた今でも琴音の事を引きずつている息子が心配だつた。

親友を亡くして以来、息子は火が消えたようになつた人が変わつてしまつた。

殆ど無口になり、すつかり笑わなくなり、小学校の頃から大好きだつた剣道もやめてしまつた。

そんな彼を見ているのが、不憫で堪らなかつた。どうにかして、彼を救いたかつた。

「でも、このままやつやつて後ろ向きに生きてても、あなたは幸せになんて……」

「母さんに僕の気持ちは分からなによ」

抑揚を欠いた冷淡な口調。

母親の哀願の言葉を、一月は一言で断ち切つた。

「それに。僕にはもう、幸せになる権利なんて無いさ

続けてそう言つと、一月はマスク Gott をポケットに押し込み、再び

玄関へと向かつ。

「出掛けたる」そう言い、一月は行ってしまった。

一人残された一月の母は、大きくため息をついた。やはり、自分には無理なのか。私は彼の母親だと呟つのに、自分に一月を救うことは出来ないのか……

「誰か……あの子を救つてあげて……」

無力感と悲しみに全身を覆い尽くされ。いつのまにか、口からそんな言葉が発せられた。

『たすけて……あげようか?』

「!?

突然のその声に、母はビクッと身を震わせた。

今現在、この家の中には自分以外の者は誰もいない筈だった。では、この声の主は、一体

『こいつを……たすけてあげようか?』

小学生くらいの、幼い少女の声だつた。

誰!? 一体、誰なの……!? 居間を見渡すが、声の主は分からなかつた。

それから数十秒。その少女の声が一月の母に語りかけてくる」とはもう無かつた。

気のせい? それとも……幻聴? 一月の母はそう思つ」として、再び夕食の準備へと取り掛かつた。

九月二十四日、午後五時半。

金雀枝一月は、鶴村のある不気味な廃屋の前に立っていた。木造の一階建ての廃屋。

窓ガラスは割れていて、壁や屋根は日に見えて老朽化している。廃屋を囲むブロック塀は至る所にヒビが入っていて、手入れされない庭は雑草が繁茂していた。

さらに植えられた木々が大きく枝を伸ばし、無数の葉をつけている。そのせいで、見るからに庭や家への日当たりが悪そうだ。恐らく湿った場所を好む虫には絶好の環境なのだろう。

玄関に続く道に敷き詰められた敷石の上には、ムカデやワラジムシといった、見るだけでも人間の不快感を催す虫が這っている。正しく、ホラー映画にでも出てきそうな雰囲気の家だ。

ひとたび地震でも起これば、すぐにでも倒壊しそうな廃屋。建物を命ある物として扱うなら、この廃屋は命を失った、すなわち死んだ建物だつた。

表札には「秋崎」とある。ここが、生前の秋崎琴音が祖母と一緒に暮らしていた家だ。

言つまでもないだろうが、今現在この家は空き屋。つまりここに住んでいる人間はない。

住むどころか、村の者は誰一人としてこの家に寄り着いたとはしなかつた。

その理由は、一年前からこの村中に広まつたある噂が原因。

「女子中学生変死事件」が起つてから、この家は「呪われた家」と呼ばれるようになった。

この家には、惨殺された少女の怨霊が宿っていて、家を訪れる者を例外なく呪い殺すのだという。

さらに、少女の靈は自分が受けた痛みを他人に味わせようと、呪い殺した者の腹を裂くらしい。

これらはあくまで、ただの「噂」に過ぎない事だ。

しかし、鶴村には死者の残留思念、つまり死者がこの世に残した想いを重んじる風習がある。他にも、死者を愚弄する者には祟りがあるといふ言い伝えもあるのだ。

故に誰一人、自分から進んでこの「呪われた家」に近づこうとする者はいなかつた。（ただし、一月の知る限りでは、だが……）。

そして今正に、一月はこの「呪われた家」に足を踏み入れようとしていた。

恐れが無い、と言えば嘘になる。しかし、恐れよりも寧ろ、真実を知りたいという気持ちの方が強かつた。

二年前の今日、琴音はどうして殺されたのか。彼女を殺した犯人は、一体誰なのか。

目の前の不気味な家、「秋崎の廃屋」に、何か手掛かりがあるのかも知れなかつた。

一月には最早、引き下がるつもりは無かつた。

琴音を殺した犯人、警察が見つけられないなら、僕が見つけてやる。見つけ出して、琴音が味わつた以上の苦しみを『えてやる……！』

意を決して、一月は眼前の廃屋へと足を進め始めた。

彼の足が廃屋の敷地内に届こうとした、その時
後ろから、聞き慣れない少女の声が聞こえた。

『ダメ……その家に入つたら、ダメ……』

一月ははつとして振り向いた。

自分の後ろには 誰もいない。

「…………」

今の少女の声、気のせいだらうか？
或いは、この「呪われた家」に無意識に恐れを抱いていて、その恐
れの念が発した幻聴なのか。

一月は踵を返し、「呪われた家」に向き直る。
そして彼は、家の入口へと歩を進め始めた。

其ノ參 ～呪ワレタ家～（後書き）

感想など、待っています。

次から本格的に、怖くなる予定です……

其ノ四 ～灰色ノ日記帳～（前書き）

追い迫る恐怖。恐怖。恐怖……

其ノ四 ～灰色ノ日記帳～

「つ…………！」

玄関の引き戸を開けて廃屋に足を踏み入れた一月は、思わず表情をしかめた。

琴音が生前祖母と二人で暮らしていたこの家は、かつて人の営みがあつたとは思えない程に荒れ果てていたのだ。

壁は至る所が剥げて木目がむき出しになっていて、天井の一部分が腐って梁が落ちている。

外観以上に内部の老朽化は激しく、不気味で悍ましい雰囲気が辺りを満たしていた。

現在は陽が落ち始めている時刻という事に加え、庭の木々に遮られて日当たりが悪い所為だろう。

廃屋の中は非常に薄暗く、数メートル先も見渡せない程だ。
さらに、廃屋内には土やカビのような臭いが漂っていて、空気がひどく淀んでいる。

息を吸うたびに、鼻腔に淀んだ空気が流れ込んでくる。

……人家とは、一年間放つておかれただけでここまで荒廃するものなのか。

制服の袖で鼻と口を覆い、土足のまま、一月は再び歩き始めた。

土間から一段上がる、板張りの廊下だった。
床板も腐食が進んでいるようだ。歩くたびに、ギシイ、ギシイ……
と不快な音がする。

廊下を歩いて、一月は手近にあつた右側の扉を開けた。

その部屋には割れた窓があつて、微かに差し込んだ陽の光が部屋の中を照らしていた。

廊下と比べれば明るかつたものの、それでも薄暗いことに変わりはない。

地面を踏んでいる感触が廊下と違う。板張りの床じゃない。視線を下に向けると、土まみれのボロボロのカーペットが敷かれていた。

「（……カーペット？）」

一月はふと思う。

カーペットが敷かれているということは、この部屋は人と接する機会の多かった部屋ではないだろうか。少なくとも、人が全然立ち入らないような部屋にカーペットを敷いたりはしないだろう。

「（）う暗いと、何も出来ないな）」

制服のポケットを探り、一月は銀色の小さなキー ホルダーライトを取り出した。

普段は、家や自転車の鍵を一まとめにするのに使っている物だ。円筒型の形で、ボタン電池内臓。丸いボタンを押せばそれだけで白色のLEDが点灯する。

懐中電灯程の明るさはないが、これで少しば暗闇を紛らわせる筈だ。

キー ホルダーライトを点灯させる。すると部屋の一部が少しだけ明るくなり、部屋の脇に置かれた机が一月の視界に入った。

割れた窓からの風雨に侵されたのだろう。机の上にはボロボロの紙やノートや教科書、プリントファイル。それからシャープペンシルやボールペン等の筆記用具が散乱し、それらの一部は床にまで落ちていた。

「（いや、待て……！…）」

ふと、一月は気付いた。

ノートや教科書、プリントファイル。

それらを使うのは、主に高校生や中学生、すなわち「学生」ではないだろうか？

ここが「廃屋」になる前は、二人の人間がここで暮らしていた筈。一人は琴音の祖母。そしてもう一人は他でもない、秋崎琴音。

だとすれば、この部屋は

「（まさか、琴音の部屋……！…）」

その一月の予感は、程なくして確信に変わった。

壁に掛けられた、ヒビの入った額縁に収められている一枚の表彰状によつて。

キーホルダーライトでその表彰状を照らし、一月は印刷された内容を読む。

表彰状

秋崎 琴音

上記の者を、日本剣道協会公認、第37回夏の剣道大会中学生部門において、

優勝したことを利用して証明します。

……その下には日付と剣道協会会長の名が印刷されていた。けれど、名前以外の文章など、もはや頭に入らなかつた。この表彰状は、あの中学一年の夏の剣道大会の時の物だつた。決勝戦で一月と琴音が戦い、琴音が勝利した時の。

「（やつぱり……）」の部屋は……」

嫌でも理解せざるを得なかつた。
琴音への表彰状があるといふことは、やはりそうだ。そうだったのだ。

ここは彼女の、琴音の部屋だ。

机の上に散乱したノートや教科書は、全て生前の彼女が使つていた物なのだ。

琴音の部屋、恐らくは存命の間に彼女が最も接していた場所だらう。二年前に命を失うままで、彼女はあるベッドで眠り、あの机で勉学に励み、そして

足元に落ちてこむこの日記帳に、一日の出来事を綴つていた。

「……」

足元に落ちていたノートには、灰色の表紙にサインペンで「日記帳」と書かれ、その下に「秋崎琴音」と書かれていた。
間違いない、一月には分かる。「」の字は間違いなく、琴音の字だ。

灰色の日記帳を拾い上げ、手で土埃を払う。

そこいらの文具店や百均で売っているよつな、「」へ一般的な日記帳だつた。

一年間ずっとここに落ちていたせいで汚れや傷みが酷いが、内容を確認することは出来そうだ。

「……」

灰色の日記帳の表紙を見つめ、一月は暫く黙っていた。自分が手にしているこの日記帳程、彼女の死に関する手掛かりに繋がりそうな物は無いかも知れない。

だが故人と言えども、これは他人の、それも自分が想いを寄せていた少女の日記帳だ。

勝手に見るのは、やはり気が引ける。

しかし、見なければ何も前に進まない。彼女の死の真相も、彼女を殺した犯人もわからない。

「（「めん琴音……君の死の真相を知るためだ。この日記帳、読ませてもらつよ……）」

一月は心の中で、今は亡き琴音に告げた。
もしも彼女が生きていいたら、何と言うのだろう。

灰色の日記帳の表紙をめくる。一ページ目、日付は二年前の九月十九日から始まっていた。

琴音が殺されたのは、九月二十四日。九月十九日ということは、その五日前ということになる。

所々破れ、織り目が付き、白かったであるペーページの紙は、黄土色に変色していた。

そして、その黄土色の紙の上には、シャープペンシルで、横書きで、琴音の字で、日記が綴られていた。

一月はキー ホルダーライトを口で銜え、日記帳を照らす。
開いた両手で日記帳を持ち、琴音の日記を読んだ。

二 ××年、九月十九日。

今田は、朝からいっちゃんと会つた。

中学に進学してから一緒に遊ぶことは減っちゃつたけど、家は近いし、

剣道部の時にも、剣道場でも会えるからまあいつか。
にしても、いっちゃんは相変わらず丼玉焼きにソースをかけて食べて
るって言つてた。

丼玉焼きには、断然絶対醤油だよね。

今日の英語の授業で、単語の小テストがあつた。

15点満点のうち、私は14点でいっちゃんは15点。いっちゃんやっぱ凄いなあ……

もひじき中間試験がある。数学勉強しないと、赤点になっちゃう。

じゃあ、今日も夜十一時まで勉強するとしますか。

「これが、一ページ丼に書かれた内容だった。

文中に数回出てきている「いっちゃん」とは、琴音が付けた一月の愛称。

小学校の頃に初めて知り合つた頃は、琴音は一月を「金雀枝君」と呼んでいた。

その後、仲良くなるにつれて、彼女は一月を親しみを込めて、「いっちゃん」と呼ぶようになった。

それまでニックネームを受けられたことが無かつた一月には、そう

呼ばれるのは中々に新鮮だつた。

だけども、そのニックネームで僕を呼ぶ人はいない。

灰色の日記帳を読むうちに、一月は琴音が在りし時のこと思い出し、涙が出そうになつた。

琴音が隣にいた日々に戻りたかった。

もう一度、「いっちい」と自分のことを呼んでもらいたかった。しかしそれは、所詮叶わぬ願い。彼女はもう、この世にはいないのだから。

琴音と共に過いした日々は、どんなに願おうと、何をしようとも、取り戻すことは出来ない物。

何故なら、死んだ人間は絶対に生き返らないからだ。

「（……ぐつ……ーー）」

一月の悲しみに溢れた表情が、一瞬で険しい表情へと変わる。日記帳を持つ手に、力が籠る。

彼は心の中で、琴音の命を奪つた人間への怒りを再燃焼させた。親友であり、想い人でもあつた彼女を惨たらしく殺し、彼女の人生という名の道を断ち切つた犯人。どんな道理があろうとも、許すわけにはいかなかつた。

「（必ず……突き止めてやるーー）」

口に銜えたキー ホルダーライトで灰色の日記帳を照らし、一月は再びページをめくり始めた。

日記を読み進めたが、それから数ページは一ページ目と変わりなく、彼女の一日の出来事が綴られていた。

九月二十一日を読み終え、次のページは二十二日。
琴音が命を失う日の、前日の日記だ。

二〇〇〇年、九月二十二日。

今日、いつもと×××を×た。

彼とこな風に×ン×したこ×は、今×で一度も無××たと思×。
××ちい、ひ×い事言×て

日記はまだ続いているようだが、そこから先のページが破り取
られている。
このページは特に汚れと痛みが酷く、断片的にしか読み取れない。

「(……!?)」

何かがある。このページには、何か重大な事が隠されている。
そんな確証はどこにも無かつた。しかし、一月にはそれが分かつた。
辛うじて読み取れる部分に目を凝らし、一月は考える。

「彼とこな風に×ン×したこ×は、今×で一度も無××たと思×。

」

気になつたのが、二行目のこの文章。

一年前の九月二十二日に、何があつたといふのだろうか?
一月は記憶を辿る。しかし、その問い合わせは出てこなかつた。

しかし、琴音が命を失う前日に何かがあつたことは間違いない。
そしてその「何か」に、恐らく一月自身も関わつてゐるようだつた。

このページの破り取られた部分が見つかればその答えが分かるのだろうが、この荒れた部屋の中で紙切れ一枚を探すのは困難だ。

「（このページで終わりか……）」

この今となつては殆ど読めない日記が書かれた翌日が、事件が発生した日。

すなわち、琴音が殺された田だ。

田舎を書く人間がいたな。だが以上 次のページは恐らく田舎だ。

そう思つて一冊は、何気なくページをめくつた。

では、なかつた。

「ウ！」

ページをめくった瞬間だった。喉の奥から、無意識に呟き声が漏れた。

弾くように日記帳を突き離し、反射的に後ずさる。

銃えていたギー・ホルター・ライトが「から落ち、ガレッジの上に転がつた。

「…………何なんだよ、これ…………！？」

落ちた日記帳は、まるで意志を持つていぬかのようにならぬページを開き続けていた。

白紙だと思っていたページに書かれていたのは、ただの「文字」。

六二、凶。三十日行のページを埋め刃へ刃を突き刺すと「殺してやる」と書かれていた。

「（何だよ、これ……一体何だつていうんだよ……！？）」

白紙である筈のページに文字が書き込まれていたのに驚いたのは確かだ。

普通に考えれば、死んだ人間が日記を書ける筈がない。
だとすればこれは、彼女が命を失う前に書かれた物なのだろうか。

いや、問題はそこではない。問題は、書かれている内容だ。

「殺してやる」という字の羅列はきれいな字だが、言いようの無い殺意と狂氣、そして不気味さに満ちている。

このページを見ているだけでも、気分が悪くなりそうな程に。

一月は知っている。琴音は心優しい性格の少女だった。

こんな言葉を、彼女が使う筈が無い。

何かの間違いだ。そうであることを祈り、カーペットの上の日記帳を見返した。

だが、これはやはり琴音の字だ。見間違つ筈など無かつた。

「うう……」

唾をのみ込み、精神を落ち着かせる。一月はもう一度日記帳に手を伸ばす。

伸ばした右手が、日記帳に届いた時

廊下の方から、パリン。と何か割れるような音が響いた。

「…」

突然の物音に驚き、一月は開け放たれた扉の方に視線を向ける。扉の向こうには、廊下の壁があつた。老朽化して、所々木目が剥き出しになつた壁。

今のは……皿が割れるような音だ。

「（誰かいるのか……？）」

先ほど落としたキー ホルダー ライトを拾い、一月は琴音の部屋を出る。

するともう一度、パリン、と何かが割れるような音が響き渡つた。こんな音が、偶然に発せられるのは考えにくい。

きっと誰かが、皿か何かを意図的に叩き割つてこの音を出しているのだろう。

だとすれば、この廃屋には、誰か一月以外の人間がいる筈だ。

「(……ここか……?)」

音は、どうやら廊下と襖で仕切られたこの部屋から発せられている
ようだ。

其ノ四 ～灰色ノ日記帳～（後書き）

どうでしたか？

今回は結構なボリュームとなりました。
感想、評価、お気軽に下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0205y/>

Nacht 置き去りにした一つの思い出

2011年11月4日17時19分発行